P1-066

医療系大学生の LGBT に対する意識

鈴木 康江[1]、吉田 のぞみ[2]、森脇 実和子[3]、大島 明日香[4]、上田 沙耶[5]、大島 麻美[1]、大谷 多賀子[1]

[1]鳥取大学医学部 保健学科
[2]日本赤十字社　医療センター
[3]神戸市立西神戸医療センター
[4]社会福祉法人石井記念愛染園附属愛染橋病院
[5]大阪北野病院

【目的】
LGBT とはレズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（心と体の性の不一致）の頭文字をとった総称である。近年世界的に LGBT に対する取り組みが進み、日本国内でも LGBT に対する意識や政策は変化しつつあるが、未だ課題は存在する。課題の1つとして、医療機関において医療従事者の LGBT への理解の不足による関わり方が当事者に戸惑いや困難感をもたらしていることが挙げられる。本研究では、医療に関する教育を受けている段階でかつ一般的な尺度も併せ持つ看護学生が LGBT をどのように受け止めているかを明らかにし、課題を検討した。
【方法】
A医療系大学生320名（うち看護学専攻240名、検査学専攻80名）の男女を対象に無記名による質問紙調査を行った。調査期間は2016年10月13日～21日。留め置き法で回収した。調査は基本属性の他、性差観スケール（伊藤、2000）、LGBT に関する用語の認知度、教育などを調査した。
【倫理的配慮】
もって同意が得られたとみなした。なお、研究は鳥取大学医学部倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した。（承認番号1609A126）。尚、利益相反関係はない。
【結果】
回答数:217名（67.8%）有効回答:202名（93.1%）であった。性差観スケールでは学科間差はあったが、男女間での差はなかった。用語の認知において同様であった。LGBT に対するイメージにおいては「他の人と変わらない存在」と答える人が一番多かったのに対し、行動になると偏見が垣間見えることからイメージと関わりは必ずしも一致しないということが明らかになった。LGBT に関する教育によって LGBT に関連する用語の知識を獲得するだけでなく LGBT に対するイメージや気持ちに変化をもたらすことが示唆された。さらに LGBT の人が身近にいることで LGBT の人との肯定的な関わりに影響を与える傾向にあることも明らかとなった。これからの医療・看護を担う学生の LGBT への理解を深めるためには LGBT に関する教育や研修を受けるだけでなく、当事者と関わる機会を持ち、自分たちにとって身近な存在であると実感することが重要であると考えられた。

P1-067

子どもが参加する医学系研究のためのパイロットスタディ：幼児用レジリエンス尺度開発の試み

石山 ゐづ美[1]、赤間 公子[2,3]、佐藤 耕[3]、金納 史佳[3]、山縣 然太朗[4]

[1]常葉大学保育学部 保育学科
[2]信州豊南短期大学　幼児教育学科
[3]子どもの発達･学習研究所ユレーカ
[4]山梨大学大学院総合研究部医学域　基礎医学系　社会医学講座

【目的】
医学系研究の倫理指針では小児を研究対象とする場合、保護者へのインフォームド・コンセントに加え、児が自らの意向を表することができる時にはアセントを得ることが努力義務とされている。本研究グループは「7歳前後の子どものインフォームド・アセントに関する研究」を行うと同時に、アセントの手続きを経て子どもが研究に参加する「幼児用レジリエンス尺度の開発」に取り組んでいる。近年精神保健の分野で研究対象とされるレジリエンスに関して、小花和（1999）、高辻（2002）、長尾（2008）らが既に幼児用レジリエンス尺度を作成している。これらはいずれも保育者評定の方式であり、幼児が直接回答する尺度はみられない。本研究は幼児本人を面接対象とするレジリエンス尺度を、子どもおよびセラピスト（面接担当者）の協力を得て開発していくことを目的とした。
【方法】
保護者のコンセントに加え、本人からアセントが得られた4-9歳児16人を対象とし、2016年10月に、構造化面接法による調査を実施した。調査に使用したレジリエンス尺度は、前述の先行研究を参考に24項目で構成され、セラピストにより4歳児に理解可能な文言に修正された。セラピストと児が対話しながら、ボード上の6選択肢（ぜんぜんおもわない - すごくおもう、わからない）から児が指差して回答する方式とし、面接中の発言等も詳細に記録された。統計解析、対象児の発言内容、セラピストの見解を総合して分析を行った。
【結果】
有効回答と判断された15人の記録を分析の対象とした。尺度には生活に即した具体的表現（例：つくったものを友達にこわされたとき、怒ってもすぐに落ち着いて新しく作り直し始めることができる）を用いているため、該当する体験がない児もあり、結果として「わからない」の回答が11項目（48.5%）に含まれた。また、調査後にセラピストが相似性を指摘した項目が7組存在し、項目の統合を検討するため相関分析を行った結果、児の回答においては指摘された7組間に相関が見られなかった。
【考察】
保育者評定尺度の中には対象児本人に回答不可能な質問文があることが明らかとなり、児の実体験と合致する文言への修正が今後の課題となった。セラピストが相似性を指摘した項目間には相関がみられず、項目の統合は妥当と判断されなかった。今後は新たに、対象児に場面想定がしやすい図版の導入を検討し、開発を進めていく。

Presented by Medical*Online